

ホクレン清水製糖工場（清水町）は、10月18日～11月14日の平均糖度が16.8%。「10月下旬からの冷え込みで糖度は上がってきたが、ここからほぼ変わらないのでは」とする。北海道糖業本別製糖所（本別町）は16.5%前後の見通しとなっている。

4～9月の帯広市内は日照時間が平年比で9%長く、ビートは根周が平年より6%太くなるなど順調に生育。一方で、秋口の最低気温が高く、収穫期に雨に見舞われ、「水分を含んだ『水ぶくれ』のような状態になった」（十勝総合振興局農務課）とみている。

ビートの収穫作業はほぼ終了。道農政部の生産見込み数量（8月20日時点）によると管内は前年比0.9%増の170万トンで、道内最大になる見通し。日甜は103万トン、ホクレンは32万8000トン、北糖は34万トン程度の受け入れ数量を見込んでいる。

◆上げ幅小幅 一定の評価

管内生産者「コスト勘案も」ビート基準糖度

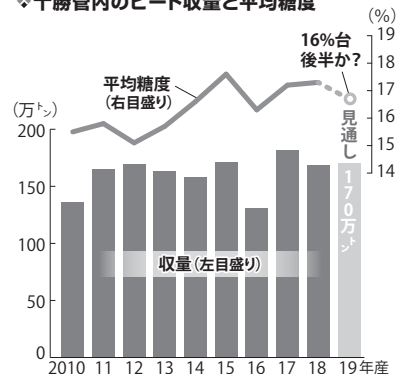
農林水産省が畑作物の直接支払交付金（ゲタ対策）を22日までに固めたことを受け、農業界からはビートの基準糖度引き上げが当初の議論よりも小幅に抑えられたことに一定の評価をする声が上がった。一方で、物流や貯蔵コストの上昇を勘案して算定してほしいとする声もあった。

ビートは糖度に応じて交付単価が変わり、基準糖度が上がると実質的な単価は低くなる。今回の見直しでは、基準となる糖度は現行から0.3%引き上げて16.6%。交付金は610円減の6840円となり、0.1%ごとに62円増減する。

当初は直近の実績を基に17.2%に引き上げる方向で議論が進んだが、地元は輪作体系や生産意欲の維持の面から据え置きを求めている。十勝地区農協組合長会の有塚利宣組合長は「16.3%とはならなかったが、政治主導の折衝で食い止め、地元の要請に応じてくれた」と話す。十勝地区農協農産対策委員会の笠井安弘委員長（JAおとふけ組合長）も「通常の算定であれば17%を超えたところだが、まずまず良かった」と受け止めた。

音更町の畑作農家の男性（59）は、基準糖度が上がり、今後作柄が悪くなればビートの作付けが減る可能性も懸念。「物流コストや貯蔵のコストも大きな負担で、そうした見えない部分も勘案してもらいたかった」と話した。

◆十勝管内のビート収量と平均糖度

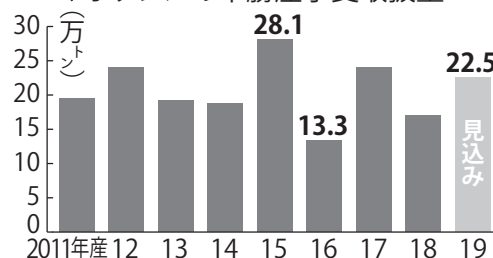


十勝産小麦 20万トン回復 品質ほぼ1等級 ホクレン扱い

2019年11月25日

ホクレンが取り扱う2019年の十勝産小麦は、前年より32%多い22万5000トンになる見通しだ。天候不順で不作だった昨年からの回復、20万トン台に乗せるのは2年ぶり。少雪や春先の高温の影響が懸念されたが、シーズン本番は平年並みの気温が続いたことで実が成熟し、品質の良い小麦が収穫された。

◆ホクレンの十勝産小麦取扱量



前年を大きく上回る収量が確保された2019年産の小麦（士幌町内の今年の収穫風景）

うどんなどに使われる中力の主力品種「きたほなみ」は21万3000トン（前年比32%増）、パンなどに使われる超強力品種の「ゆめちから」は1万1000トン（36%増）だった。

秋まき小麦は雪の中で越冬するが、昨年の暮れは少雪で凍結が心配された。5月は干ばつや35度以上の猛暑に見舞われ、枯れてしまう麦も発生した。

ただ、6～7月は平年並みの天候となり、ゆっくりと実の成熟が進行。「粒が大きく、製品の歩留まりも90%以上と高かった」（ホクレン帯広支所）とし、等級もほぼ1等の品質が確保された。

管内19年産の作付面積は3万6800ヘクタールで、前年より700ヘクタール少ないが、道内の約4割を占めている。

「道産小麦は引き合いが強い。昨年産が取れなかった分、今年は質も良く、量も確保されたので良かった」（同支所）としている。